



Title	ポリオーマウイルス温度感受性変異株ts-121でトランスフォームしたマウス細胞(121-6-5細胞)の培養温度による形質変化について
Author(s)	岡田, 安弘
Citation	大阪大学, 1976, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31562
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	岡 田 安 弘
学位の種類	理 学 博 士
学位記番号	第 3548 号
学位授与の日付	昭和 51 年 3 月 25 日
学位授与の要件	理学研究科生物化学専攻 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	ポリオーマウィルス温度感受性変異株 ts-121 で トランスフォームしたマウス細胞 (121-6-5 細胞) の培養温度による形質変化について。
論文審査委員	(主査) 教授 松代 愛三 (副査) 教授 豊島久真男 教授 春名 一郎

論文内容要旨

ポリオーマウィルス温度感受性変異株 ts-121 で transform した細胞 (121-6-5 細胞) の平板上での性質を調べた。

121-6-5 細胞は、形態及び saturation density の形質は、35°C では transform した性質を示したが、39° では nontransform の性質を示した。これらの形質は、温度変換により、交互に変わり得ることができたが、concanavalin A による細胞凝集で、細胞膜の変化をみると、35°、39° 共 transform した性質を示し、培養温度による違いはみられなかった。

121-6-5 細胞の、nontransform 状態から transform 状態への移行、あるいは transform 状態から non-transform 状態への移行には、cell cycle の関与がみられた。即ち、39° で contact inhibition がかった細胞を、35° に温度下降した場合は、DNA 合成が始まるまでには 3 日間の潜伏期がみられたが、この細胞を、hyaluronidase で強制的に分裂誘起してやると、39° では正常細胞と同様、1 回のみの分裂で再び contact inhibition がかかるのに対し、35° では潜伏期なしに 2 回目以後の分裂へと続き、transform 状態へと移行した。

温度移行実験により、1 回目の分裂期付近までに、細胞を 39° から 35° へ温度下降してやれば、2 回目以後の DNA 合成が出現するが、G₁ 期に温度下降し、G₁ 期に再び 39° に温度上昇した場合には、39° で、2 回目の DNA 合成は認められない。しかし、細胞が、1 度 35° で S 期をとおると、たえとその後、39° へ温度上昇しても、2 回目の DNA 合成は出現する。又、温度上昇の実験で、いずれの場合においても、2 回目の DNA 合成期以後の時期を 39° で培養することにより、3 回目の DNA 合成は出現しなかった。

論文の審査結果の要旨

DNA ウィルスによる細胞のトランスフォーメーションは、現在までに、ウィルス変異株を用いた報告が、数多くなされているが、トランスフォーメーションの機構は、ほとんど明らかになっていない。

本論文では、ポリオーマウィルスの温度感受性変異株 ts-121でトランスフォームしたマウス細胞の形質変化を調べることにより、トランスフォーメーションに関する数種の形質の相互関連を明らかにした。即ち、細胞の形態、*saturation density*、及び軟寒天培地中での *colony* 形成は、*transform* 状態と、*nontransform* 状態とで形質変換可能であったが、細胞膜は、*transform* 状態のままで、変化はしなかつた。

又、細胞を *hyaluronidase* で同調的に分裂誘起させ、温度移行することによりトランスフォーメーションの消長を観察した結果、トランスフォーメーションをおこす情報は、細胞の *life cycle* によって発現が規制され、G₀期からG₁期にかけては、情報が発現しないか、あるいは発現していても安定化しないが、S期においては発現し、安定化することを明らかにした。

以上のように、岡田君の研究結果は、DNA ウィルスによる細胞のトランスフォーメーションの機構の解明に多くの貢献をなしたものであり、理学博士の学位論文として十分価値あるものと判定する。